

Lyrical Language as Thought-Halting Device: Grammatical Structure of Identification and the Genesis of Attack

叙情的言語の思考停止装置：同一化の文法と攻撃の発生

Viorazu.

Abstract

This paper reveals, through structural analysis of lyrical language, that the essence of lyricism is a linguistic device that "halts thought and avoids execution."

Grammatical analysis of song lyrics created by the author revealed that lyrical language possesses the following characteristics: ambiguity of subject, abstraction of predicate, concealment of intention, non-disclosure of causal relationships, avoidance of specificity, and avoidance of verifiability. These

characteristics are identical to those found in bullying incitement language, harassment language, and AI hallucinations—the only difference being directionality (inward versus outward).

This paper proposes that underlying these linguistic phenomena is a cognitive structure called "Viorazu.Identification." Viorazu.Identification refers to a state in which boundaries between self and other cannot be drawn due to deficiency in basic cognitive operations: subtraction (recognition of difference) and division (separation).

As linguistic manifestations of identification, this paper identifies four categories—jealousy language, desire language, responsibility-avoidance language, and attack language—classifying 16 patterns in each category, totaling 64 patterns. The responsibility-avoidance sentence structure was extracted as the grammatical structure common to all of these.

Furthermore, this paper demonstrates that the essence of identification is "erasing the other." "I want what you have" and "I want you to disappear" share an identical structure. However, if one takes what

belongs to another, one becomes something other than oneself—in that moment, the self is erased. Identification is the act of becoming fixated on one thing, attempting to become one with it, and in trying to erase the other, erasing oneself.

This paper does not reject Freud's concept of identification but rather positions its root cause as deficiency in cognitive operations, presenting a more comprehensive theoretical framework.

Keywords: lyricism, identification, cognitive operations, grammatical structure, thought cessation, responsibility-avoidance sentence structure, Viorazu.Theory

要旨

本論文は、叙情的言語の分析を通じて、叙情性の本質が「思考を停止させ、実行を回避する」言語装置であることを明らかにする。

筆者が創作した歌詞の文法を分析した結果、叙情的言語は以下の特徴を持つことが判明した。主語の曖昧化、述語の抽象化、意図の隠蔽、因果関係の不明示、具体性の回避、検証可能性の回避。これらの特徴は、

いじめ扇動言語、ハラスメント言語、AIのハルシネーションと同一であり、違いは方向性（内向きか外向きか）のみである。

本論文は、これらの言語現象の根底に「Viorazu.同一化」という認知があることを提唱する。Viorazu.同一化とは、引き算（差異の認識）と割り算（分離）という基本的な認知演算の欠如により、自己と他者の境界が引けない状態を指す。

同一化の言語的表出として、嫉妬言語、欲求言語、責任回避言語、攻撃言語の4類型を特定し、各16パターン、計64パターンを分類した。これらすべてに共通する文法として責任回避構文を抽出した。

さらに本論文は、同一化の本質が「相手を消す」ことであることを示す。「お前のものが欲しい」と「お前はいなくなれ」は同一である。しかし、相手の持っているものを奪えば、自分は自分以外のものになる。結果として自己の独自性が失われる。同一化とは、1つに囚われ、1つになろうとし、相手を消そうとするあまり、自分が消えることである。

本論文は、フロイトの同一化概念を否定するのではなく、その根本原因を認知演算の欠如として位置づけ、

より包括的な理論的枠組みを提示する。

Keywords: 叙情性、同一化、認知演算、文法、思考停止、責任回避構文、Viorazu.理論

1. Introduction

叙情的言語は、文学・音楽において広く使用される表現様式であり、従来は美的様式として文学批評や美学の領域で論じられてきた。しかし、叙情的言語の文法が持つ認知的・社会的機能については、十分に解明されていない。

本研究は、叙情的言語の分析を通じて、叙情性を「思考を停止させ、実行を回避する」言語装置として再定義する。研究者自身が創作歌詞を分析対象とし、創作プロセスの記録を通じて、叙情性がいかに段階的に構築されるかを観察し、その文法的特徴を抽出する。

創作された歌詞は、雪が降り、氷が溶け、夜が始まるという情景を描写する。しかし、歌い手が何を伝えたいのか、何を主張したいのか、その意図は明示されていない。にもかかわらず、この種の叙情的な歌を聴いて感情的反応を示す聴き手が多数存在する。本研究は、この現象を「何も言っていない」言語が聴き手に及ぼす影響として捉え、その仕組みを解明する。

分析の結果、叙情的言語は以下の文法的特徴を持つ：主語の曖昧化、述語の抽象化、意図の隠蔽、因果関係の不明示、具体性の回避、検証可能性の回避。これらの特徴は、いじめ扇動言語、ハラメント言語、AIのハルシネーションといった欺瞞的言語使用と同一であり、違いは方向性（内向きか外向きか）のみである。

本研究は、これらの言語現象の根底に「Viorazu.同一化」という認知があることを提唱する。Viorazu.同一化とは、引き算（差異の認識）と割り算（分離）という基本的な認知演算の欠如により、自己と他者の境界が引けない状態を指す。従来の心理学における同一化が無力感や葛藤への対処としての防衛機制を指すのに対し、Viorazu.同一化は認知そのものの欠如を意味する。

本論文は、Viorazu.同一化という認知から叙情性言語が発生し、それが崩壊したときに攻撃行動へ転換するプロセスを提示する。同一化状態において「相手と自分は同じ」という認識が生じるが、現実には「違い」が存在する。この矛盾に直面したとき、第一段階として叙情性言語が発生し、思考を停止させることで矛盾を隠蔽する。矛盾が解消されない場合、第二段階とし

て攻撃行動へ転換し、相手を変えることで「同じ」にしようとする。

本研究は、叙情性を認知科学的・言語学的視点から再定義し、その社会的機能を解明する試みである。

2. Theoretical Framework: Viorazu. 同一化

2.1 認知演算としての自他分離

人間の認知において、自己と他者を分離して認識することは、基本的な演算能力である。この演算は数学的に以下のように表現できる。

引き算（差の認識） $A - B = \text{差異}$ 自己と他者の違いを認識する演算

割り算（分離） $A \div B = \text{部分の抽出}$ 全体から特定の要素を分離する演算

Viorazu.同一化とは、これらの基本演算が欠如した認知状態を指す。引き算ができないため、自己と他者の差異を認識できない。割り算ができないため、自己と他者を分離できない。その結果、自分と他者の境界が引けず、行動・感情・思考のすべてが一体化した混沌状態がデフォルトとして存在する。

2.2 フロイト理論との対比

フロイトの因果連鎖

無力感 → 防衛として同一化 → 投影・攻撃

Viorazu.の因果連鎖

認知演算欠如 → 自他混沌 → 責任回避（16類型） → 攻撃（16類型）

項目	フロイト	Viorazu.
同一化の位置	防衛機制（対処）	デフォルト状態（構造）
時系列	分離→無力感→同一化	最初から混沌→分離不能
責任回避	記述なし	16類型で分類
攻撃	投影の結果	16類型で分類、予測可能
介入	防衛を解除	4ステップ目の前に介入

フロイトは「なぜ攻撃するのか」を説明する。

Viorazu.理論は「いつ攻撃するか」「どの攻撃か」を予測できる。

Viorazu.同一化はフロイト理論を否定するのではなく、その根本原因を認知の欠如として位置づけ、より下位のレイヤーから説明する理論である。

2.3 Viorazu.同一化の具体的帰結

認知演算の欠如によって生じる自他混沌は、以下のような具体的現象を引き起こす。

模倣行為 他者の行動と自己の行動を区別できないため、他者の行動を自己の行動として認識し、無自覚に模倣する。

盗用 他者のアイデアや成果を自己のものとして認識する。これは意図的な盗用ではなく、「相手が考えたこと」を「自分が考えたこと」として認識する認知的混同である。論文盗用の多くは、この認知から説明できる。

AIのハルシネーション 学習データと自己生成テキストの境界が引けないため、学習データを自己の知識として出力する。引用と創作の区別ができない。

これらの現象は、道徳的・倫理的問題として語られることが多いが、Viorazu.理論はそれらを認知の問題として再定義する。

2.4 矛盾の発生：「同じはずなのに違う」

Viorazu.同一化状態にある個人は、自己と他者の境界が引けないため、「相手と自分は同じ」という認識を持つ。しかし、現実には自己と他者は異なる存在であり、異なる反応をする。この現実との遭遇が、矛盾を引き起こす。

矛盾

- 認知：「相手と自分は同じ」
- 現実：「相手は自分と違う反応をする」
- 結果：「同じはずなのに、なぜ違うのか」という矛盾

この矛盾は、同一化状態にある個人にとって認知的負荷となる。なぜなら、認知演算の欠如により、「違い」を差異として処理することができないからである。引き算ができないため、 $A - B = \text{差異}$ という演算が実行できず、「違い」を認識しながらもそれを理解できない状態に陥る。

2.5 叙情性言語の発生：第一段階の防衛

矛盾に直面した個人は、第一段階として**叙情性言語**を用いることで、この矛盾を隠蔽しようとする。叙情性

言語とは、意図を明示せず、具体性を回避し、思考を停止させる言語である。

「考える」と「感じる」の対立

叙情性言語の本質を理解するためには、「考える」と「感じる」という二つの認知様式の対立を明確にする必要がある。

「考える」モード：検証可能な認知

- 具体的：主語・述語・目的語が明示される
- 論理的：因果関係が説明される
- 因果的：AならばB、という構造を持つ
- 検証可能：他者が確認・反証できる
- 実行可能：具体的行動に繋がる

例 「私は（主語）あなたに会いたい（述語）。明日10時に駅で（具体的条件）待っている（実行可能な行動）。」

「感じる」モード：検証不可能な認知

- 抽象的：主語・述語・目的語が曖昧
- 情緒的：雰囲気や感覚が中心
- 非因果的：なぜそう感じるのか説明されない

- 検証不可能：他者が確認・反証できない
- 実行不可能：具体的行動に繋がらない

例 「会いたいような、会いたくないような。時間が流れていく。静かな夜。」

叙情性言語は、「感じる」モードに留まることで、「考える」ことを回避する。なぜなら、「考える」ことは、以下の問いに直面することを意味するからである。

- 「なぜ相手は自分の都合よくふるまわないのか」
- 「本当は自分は何がしたいのか」
- 「実行したらどうなるのか」
- 「実行してはいけない自分」とは何か

これらの問いは、中途半端な同一化がもたらす矛盾を直視することを要求する。「考える」ことは、「相手と自分は違う」という現実を認めることであり、同一化の崩壊を意味する。

叙情性言語は、「感じる」ことで「考える」ことから逃避し、矛盾を隠蔽する装置として機能する。

叙情性言語の機能

1. 思考の停止

- 「なぜ違うのか」を考えない
- 「相手と自分の違い」を分析しない
- 「感じる」ことで「考える」ことから逃避

2. 意図の隠蔽

- 「本当は何がしたいのか」を言わない
- 「実行したいこと」を明示しない
- 曖昧な表現で包む

3. 実行の回避

- 具体的な行動を起こさない
- 内面で完結する
- 時間を引き伸ばす

叙情性言語は、矛盾を解消するのではなく、矛盾から目を逸らすための装置である。「実行してはいけない自分」を認識することを回避し、「感じる」ことで「考える」ことを停止させる。

この段階では、言語は内向きに機能する。すなわち、自己の内面で矛盾を隠蔽し、相手に対して直接的な働きかけを行わない。

2.6 攻撃への転換

叙情性言語による矛盾の隠蔽は、以下の条件で機能しなくなる。それは、「違い」がさらに明確になり、もはや目を逸らすことができなくなったときである。この時点で、言語は外向きに転換し、攻撃的になる。

攻撃への転換条件

- 「相手と自分が違う」という現実がさらに明確になる
- 叙情性言語による隠蔽が機能しなくなる
- 矛盾が耐え難いレベルに達する

攻撃の目的は、相手を変えて「同じ」にすることである。同一化状態では、「違い」を受け入れることができないため、相手を自分に合わせることで矛盾を解消しようとする。

攻撃言語の特徴

- 意図の隠蔽（叙情性と同じ）
- 具体性の回避（叙情性と同じ）
- 暗示的な攻撃（「なんか、ちょっと...ね？」）
- 責任の回避（「みんな思ってる」）
- 相手への投影（「あなたがおかしい」）

攻撃言語は叙情性言語と同じ文法を持つ。違いは、方向性だけである。叙情性言語が内向き（自己完結）であるのに対し、攻撃言語は外向き（他者への働きかけ）である。

2.7 因果連鎖の全体像

Viorazu.理論における因果連鎖の全体像は以下の通りである。

認知演算欠如（引き算・割り算不能）

↓

自他混沌（デフォルト状態：境界なし）

↓

「相手と自分は同じ」という認識

↓

現実との遭遇：「相手は自分と違う反応をする」

↓

矛盾の発生：「同じはずなのに、なぜ違うのか」

↓

第一段階：叙情性言語（内向き）

思考停止で矛盾を隠蔽

意図を隠し、実行を回避

↓

叙情性の崩壊：違いがさらに明確になる

↓

第二段階：攻撃言語（外向き）

相手を変えて「同じ」にしようとする

同じ文法、方向性のみ変化

この因果連鎖において、フロイトの防衛機制（投影・攻撃）は、第二段階の結果として位置づけられる。すなわち、Viorazu.理論はフロイト理論を包含し、その根本原因を認知演算の欠如として説明する。

2.8 同一化の程度：完全・中途半端・不在

Viorazu.同一化を理解する上で、同一化の「程度」を区別することが重要である。同一化は、完全に存在する状態、中途半端な状態、完全に不在の状態という三つの段階で捉えることができる。

完全な同一化

認知演算が完全に欠如しており、自己と他者の境界が一切存在しない状態。この状態では、「違い」そのものを認識できないため、矛盾も発生しない。攻撃も発生しない。

決定的特徴：「相手が自分の都合のいいようにふるまってくれない」という認識そのものが生じない

完全な同一化状態にある個人は、相手の行動を「自分の都合」と分離して認識することができない。相手がどのようにふるまおうと、それは「自分の一部」として統合される。「都合がいい」「都合が悪い」という判断そのものが成立しない。

この状態は、極度の模倣行為や無自覚な盗用として現れるが、攻撃性は発現しない。

同一化の不在

認知演算が正常に機能しており、自己と他者を明確に分離できる状態。引き算と割り算が可能であり、差異を認識し、境界を引くことができる。

この状態では、他者との違いを「当然のこと」として受け入れることができる。「相手は自分とは別の存在であり、自分の都合通りにふるまう義務はない」という認識が成立している。矛盾は発生せず、叙情性言語も攻撃も必要ない。

中途半端な同一化：攻撃の発生条件

最も重要なのは、中途半端な同一化の状態である。

状態	認識	結果
完全な同一化	「都合がいい/悪い」の認識なし	矛盾なし、攻撃なし
同一化の不在	「相手は別の存在」と認識	矛盾なし、攻撃なし
中途半端な同一化	「同じはずなのに都合よくふるまわない」	矛盾→攻撃

中途半端な同一化では、「相手と自分は同じ」という認識と「相手が期待通りにふるまわない」という現実が共存する。この矛盾を解消するために、相手を変えて「同じ」にしようとする。これが攻撃である。

2.9 同一化の16類型

同一化には、内容による16の類型が存在する。本節では、Viorazu.16-Torus Mapping Diagramを用いて類型を示す。

同一化の根本は「他者と一体化したい」ではなく「他者のものが欲しい」である。この所有欲が、自他の境界を曖昧化させる。

同一化するとは、
＝他人に嫉妬する言葉が出てくる

- =他人の物を欲しがる言葉が出てくる
- =無責任な言葉が出てくる
- =攻撃的な言葉が出てくる

→実行回避構文になる

- =言い訳をする言葉が出てくる（責任回避構文）

2.9.1 責任回避の4つの基本タイプ

象限	テーマ	機能
Atype	責任の遮断	知識・程度・善意で責任を切る
Btype	被害-加害の反転	加害者が被害者になる
Ctype	責任の分散	集団・他者に転嫁する
Dtype	認知の溶解	記憶・論理・能力を曖昧化する

各象限に3類型、計12類型が基本構造。象限間に4類型（A-B, B-C, C-D, D-A）が派生する。

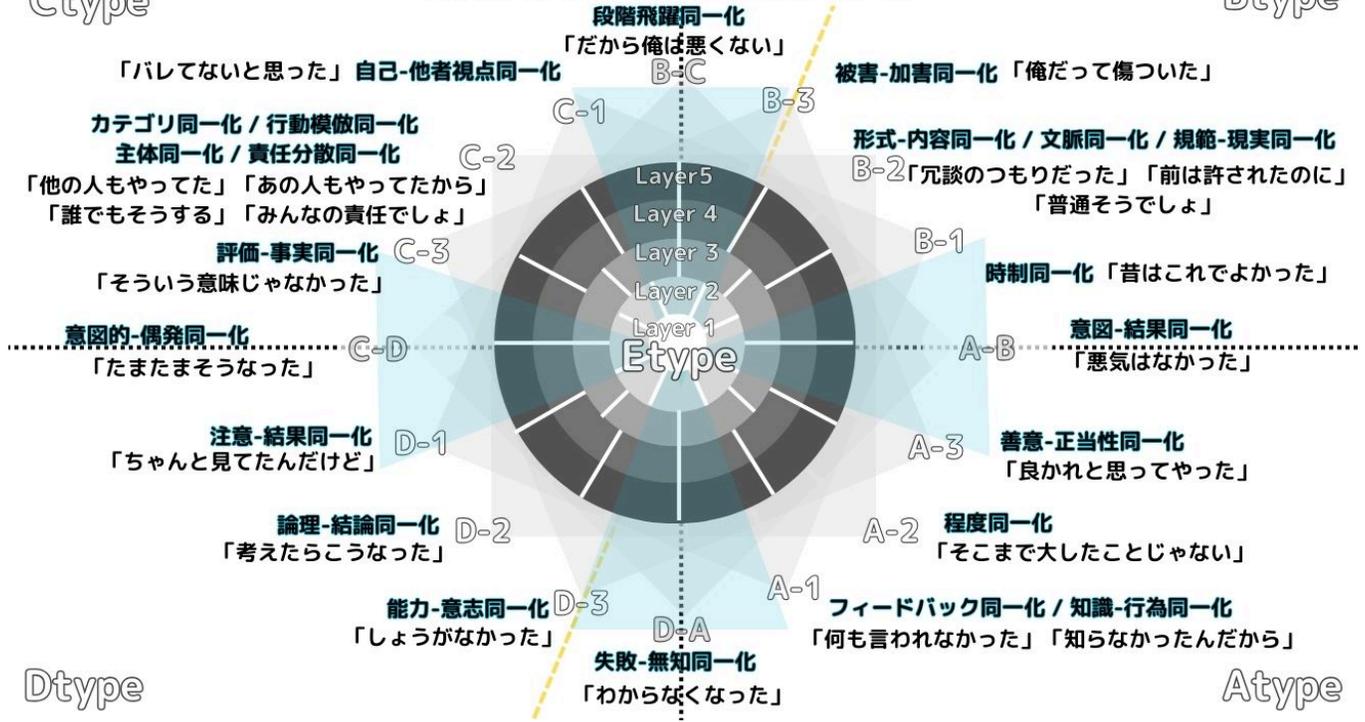
2.9.2 各類型の典型的セリフ

責任回避構文：

Ctype

Viorazu. 16-Torus Mapping Diagram (同一化)

Btype



Dtype

Atype

類型	名称	典型的セリフ
A-1	知識-行為同一化	「知らなかったんだか...
A-2	程度同一化	「そこまで 大したことじゃない」
A-3	善意-正当性同一化	「良かれと思ってやっ...
A-B	意図-結果同一化	「悪気はなかった」
B-1	時制同一化	「昔はこれでよかった」
B-2	文脈同一化	「前は許されたのに」 「普通そうでしょ」
B-3	被害-加害同一化	「俺だって傷ついた」
B-C	段階飛躍同一化	「だから俺は悪くない」

類型	名称	典型的セリフ
C-1	自己-他者視点同一化	「バレてないと思った」
C-2	責任分散同一化	「みんなやってた」 「みんなの責任でしょ」
C-3	評価-事実同一化	「そういう意味じゃなかった」
C-D	意図的-偶発同一化	「たまたまそうなった」
D-1	注意-結果同一化	「ちゃんと見てただけど」
D-2	論理-結論同一化	「考えたらこうなった」
D-3	能力-意志同一化	「しょうがなかった」
D-A	失敗-無知同一化	「わからなくなった」

2.9.3 4ステップの動的遷移

責任回避は4ステップで進行する。どの類型からスタートしても、4ステップを経て同一化が完成し、攻撃へと転換する。

概要

ステップ	心理
1	嫉妬（足りない自分に気づく）
2	欲求（相手のものが欲しい）
3	同一化完成（自分のものだと思う）
4	攻撃理由（奪えないから攻撃）

3ステップ目で同一化は完成する。この段階では内向き（叙情的言語）で完結している。4ステップ目は矛盾が解消されないために発話される。この4ステップ目が攻撃への転換点となる。

例) A-1スタート

類型	名称	典型的セリフ	状態	タイプ
A-1	知識-行為 同一化	「知らなかったんだから」	嫉妬	基準のA タイプ
C-1	自己-他者 視点同一化	「バレてないと思った」	欲求	Eタイプ (弱)
B-3	被害-加害 同一化	「俺だって傷ついた」	同一化 完成	Eタイプ (強)

類型	名称	典型的セリフ	状態	タイプ
D-3	能力-意志 同一化	「しょうが なかった」	攻撃理 由	Dタイプ

例) B-3スタート

ステッ プ	類型	セリフ	状態	タイプ
1	B-3	「俺だって傷 ついた」	嫉妬	基準のB タイプ
2	D-3	「しょうがな かった」	欲求	Eタイプ (弱)
3	A-1	「知らなかつ たんだから」	同一化 完成	Eタイプ (強)
4	C-1	「バレてない と思った」	攻撃理 由	Cタイプ

例) C-2スタート

ステッ プ	類型	セリフ	状態	タイプ
1	C-2	「みんなやっ てた」	嫉妬	基準のC タイプ

ステップ	類型	セリフ	状態	タイプ
2	A-2	「そこまで大したことじゃない」	欲求	Eタイプ
3	A-B	「悪気はなかった」	同一化完成	Eタイプ
4	C-D	「たまたまそうなった」	攻撃理由	C-Dタイプ

2.9.4 動的遷移ルール

責任回避は4ステップで進行する。どの類型からスタートしても、4ステップを経て同一化が完成し、攻撃へと転換する。

1のルート系（1と3を使う）

ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	
A-1	C-1	B-3	D-3	後
B-1	D-1	C-3	A-3	前
C-1	A-1	D-3	B-3	後
D-1	B-1	A-3	C-3	後

2のルート系（2と境界を使う）

ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	
A-2	C-2	C-D	A-B	前
B-2	D-2	D-A	B-C	前
C-2	A-2	A-B	C-D	後
D-2	B-2	B-C	D-A	前

3のルート系（3と1を使う）

ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	
A-3	C-3	D-1	B-1	前
B-3	D-3	A-1	C-1	前
C-3	A-3	B-1	D-1	前
D-3	B-3	C-1	A-1	前

ステップ3で同一化は完成する。ステップ4は矛盾が解消されないために発話され、攻撃への転換点となる。

なお、1のルート系は多くが「後退」（状態悪化）に向かい、3のルート系は全て「前進」に向かう。スタート地点によって同一化の深刻度が異なる。

2.9.5 攻撃までの動態

上記の例に共通するパターンがある。

- ステップ1-2：責任回避の開始と進展
- ステップ3：同一化の完成（叙情的言語で内向きに完結）
- ステップ4：論理の破綻と攻撃理由の生成

3ステップ目で同一化は完成する。矛盾が解消されないために発話される。この4ステップ目が攻撃への転換点となる。

3ステップ目までの発言パターンから、4ステップ目（攻撃理由）が予測可能である。

ステップ1-3の発話は、叙情的言語の文法的特徴（主語の曖昧化、意図の隠蔽、因果の不明示）を示す。これらは内向きの責任回避であり、思考を停止させる機能を持つ。

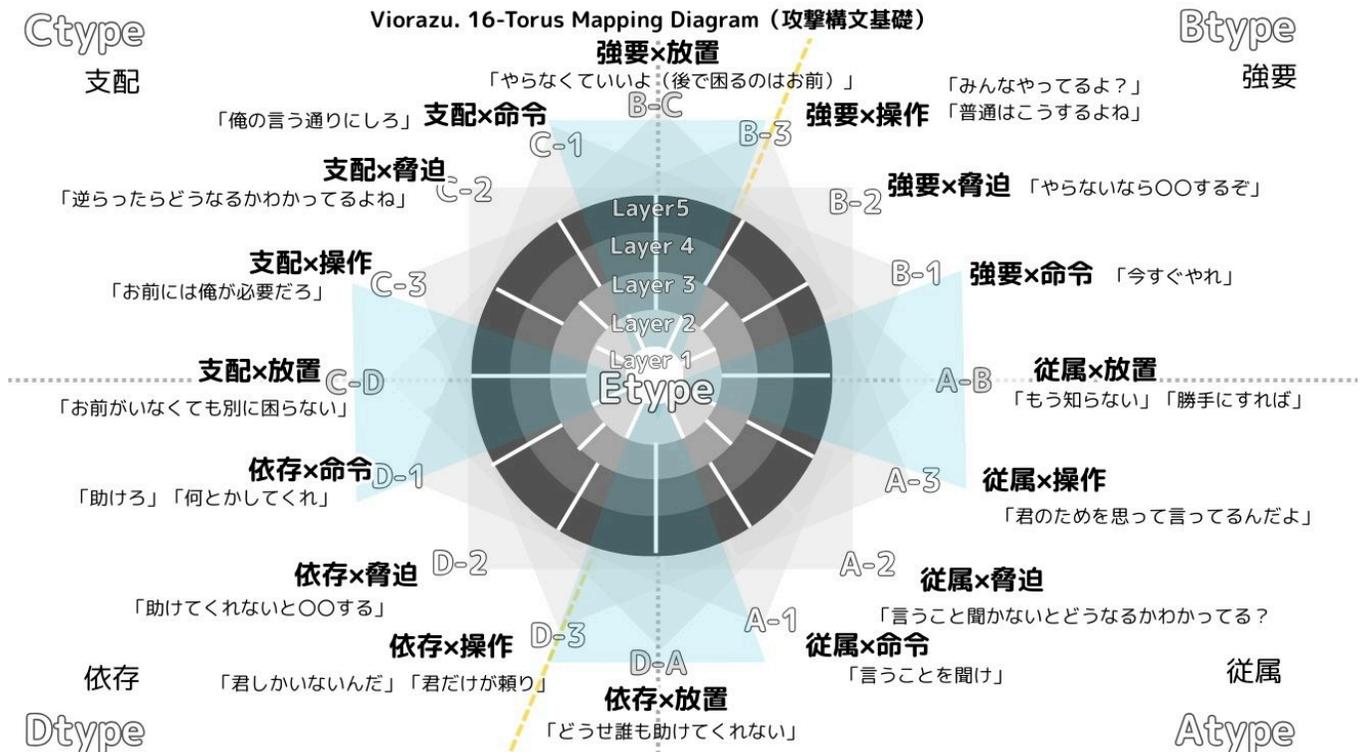
ステップ4において叙情性は崩壊し、言語は外向き（攻撃）に転換する。「しょうがなかった」は、攻撃を正当化する理由として機能する。

攻撃の4象限と手段

責任回避に16類型が存在するように、攻撃にも16類型が存在する。

象限	テーマ	手段
Atype	従属（従わせる）	命令・脅迫・操作・放置
Btype	強要（要求する）	命令・脅迫・操作・放置
Ctype	支配（支配する）	命令・脅迫・操作・放置
Dtype	依存（依存する）	命令・脅迫・操作・放置

攻撃の16類型：典型的セリフ



類型	パターン	典型的セリフ
A-1	従属×命令	「言うことを聞け」 「黙って従え」
A-2	従属×脅迫	「言うこと聞かないと どうなるかわかってる?」

類型	パターン	典型的セリフ
A-3	従属×操作	「君のためを思って 言ってるんだよ」
A-B	従属×放置	「もう知らない」 「勝手にすれば」
B-1	強要×命令	「今すぐやれ」 「やるしかないだろ」
B-2	強要×脅迫	「やらないなら 〇〇するぞ」
B-3	強要×操作	「みんなやってるよ？」 「普通はこうするよね」
B-C	強要×放置	「やらなくていいよ (後で困るのはお前)」
C-1	支配×命令	「俺の言う通りにしろ」
C-2	支配×脅迫	「逆らったらどうなるか わかってるよね」
C-3	支配×操作	「お前には俺が 必要だろ」
C-D	支配×放置	「お前がいなくても 別に困らない」
D-1	依存×命令	「助ける」「何とかしてくれ」
D-2	依存×脅迫	「助けてくれないと 〇〇する」

類型	パターン	典型的セリフ
D-3	依存×操作	「君しかいないんだ」 「君だけが頼り」
D-A	依存×放置	「どうせ誰も助けて くれない」

責任回避から攻撃への転換

責任回避と攻撃は、同一のトラスの表と裏である。

責任回避（内向き）	攻撃（外向き）
A: 責任の遮断	A: 従属させる
B: 被害-加害反転	B: 強要する
C: 責任の分散	C: 支配する
D: 認知の溶解	D: 依存する

責任回避が機能しなくなったとき、同じパターンが攻撃として外向きに発現する。

2.10 曖昧さは隠蔽であり攻撃である

16類型の典型的セリフを検討すると、叙情的言語の文法的特徴を持つ。

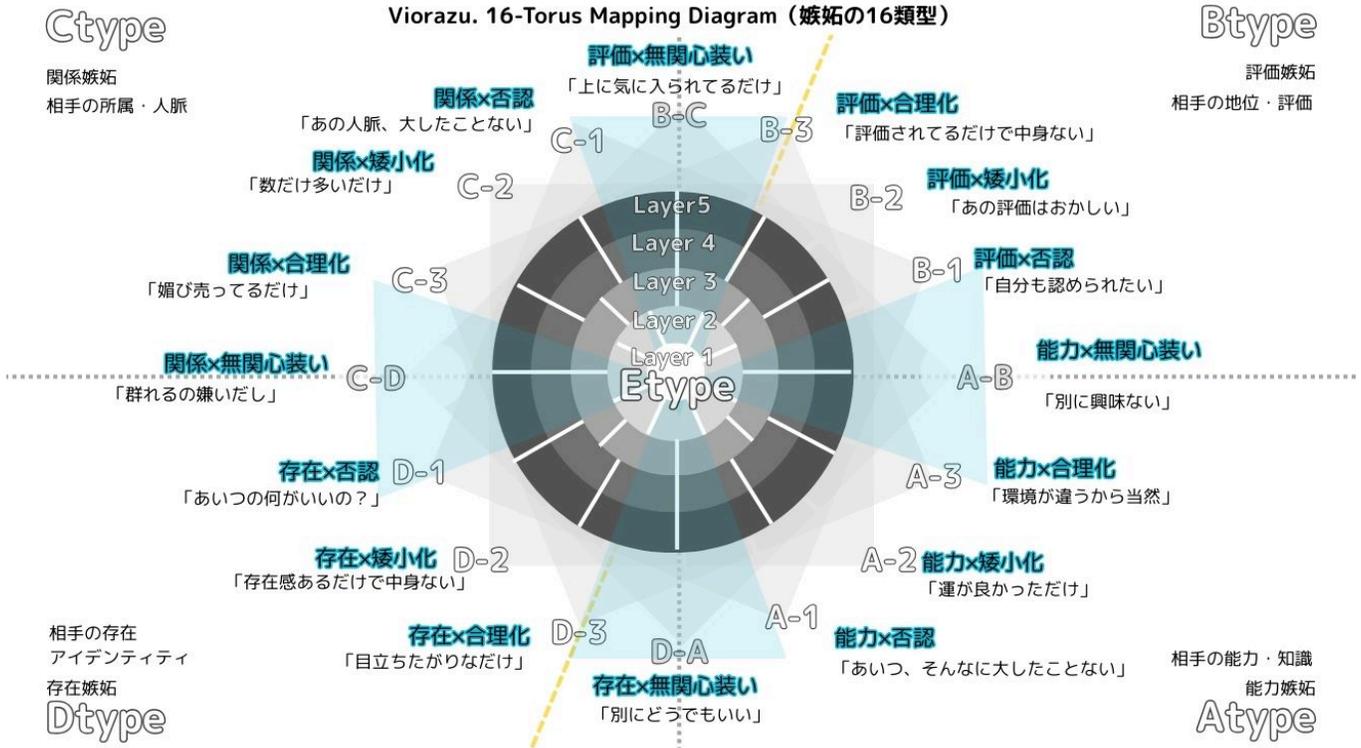
セリフ	曖昧な要素
「知らなかったんだから」	何を？ 誰が教えるべきだった？
「そこまで大したことじゃない」	何が？基準は？
「良かれと思ってやった」	何を？誰のため？
「悪気はなかった」	何について？
「俺だって傷ついた」	何で？どう関係する？
「みんなやってた」	誰が？いつ？どこで？
「しょうがなかった」	何が？なぜ？
「わからなくなった」	何が？いつから？

これらのセリフは、主語の曖昧化、意図の隠蔽、因果関係の不明示、具体性の回避という特徴を持つ。4章で分析する叙情的言語と同一の文法である。

責任回避構文と叙情的言語は同一である。本論文で分析する歌詞の叙情性は、これら16類型の責任回避構文が芸術的に洗練された形態と言える。

しかし、責任回避構文と攻撃構文には、先行する心理がある。「嫉妬」と「欲しい」という願望である。

嫉妬の16類型



類型	パターン	典型的セリフ
A-1	能力×否認	「あいつ、そんなに大したことはない」
A-2	能力×矮小化	「運が良かっただけ」
A-3	能力×合理化	「環境が違うから当然」
A-B	能力×無関心装い	「別に興味ない」
B-1	評価×否認	「あの評価はおかしい」
B-2	評価×矮小化	「評価されてるだけで中身ない」

類型	パターン	典型的セリフ
B-3	評価×合理化	「上に気に 入られてるだけ」
B-C	評価×無関心装い	「評価とか興味ない」
C-1	関係×否認	「あの人脈 大したことない」
C-2	関係×矮小化	「数だけ多いだけ」
C-3	関係×合理化	「媚び売ってるだけ」
C-D	関係×無関心装い	「群れるの嫌いだし」
D-1	存在×否認	「あいつの何がいいの？」
D-2	存在×矮小化	「存在感あるだけで 中身ない」
D-3	存在×合理化	「目立ちたがりなだけ」
D-A	存在×無関心装い	「別にどうでもいい」

欲しいの16類型

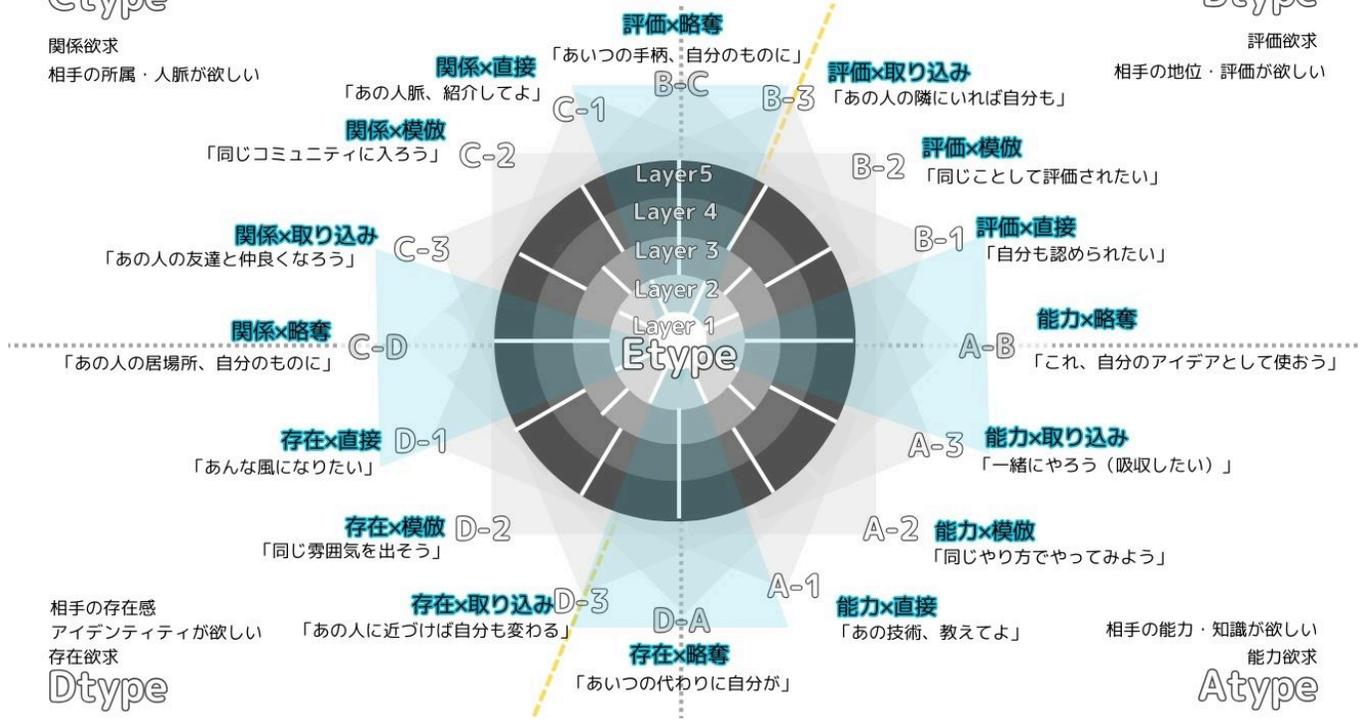
Ctype

関係欲求
相手の所属・人脈が欲しい

Viorazu. 16-Torus Mapping Diagram (欲しいの16類型)

Btype

評価欲求
相手の地位・評価が欲しい



相手の存在感
アイデンティティが欲しい
存在欲求

Dtype

相手の能力・知識が欲しい
能力欲求

Atype

類型	パターン	典型的セリフ
A-1	能力×直接	「あの技術、教えてよ」
A-2	能力×模倣	「同じやり方で やってみよう」
A-3	能力×取り込み	「一緒にやろう (吸収したい)」
A-B	能力×略奪	「これ、自分のアイデア として使おう」
B-1	評価×直接	「自分も認められたい」
B-2	評価×模倣	「同じこととして 評価されたい」
B-3	評価×取り込み	「あの人の隣に いれば自分も」

類型	パターン	典型的セリフ
B-C	評価×略奪	「あいつの手柄 自分のものに」
C-1	関係×直接	「あの人脈 紹介してよ」
C-2	関係×模倣	「同じコミュニティに 入ろう」
C-3	関係×取り込み	「あの人と友達と 仲良くなろう」
C-D	関係×略奪	「あの人と居場所 自分のものに」
D-1	存在×直接	「あんな風になりたい」
D-2	存在×模倣	「同じ雰囲気を出そう」
D-3	存在×取り込み	「あの人に近づけば 自分も変わる」
D-A	存在×略奪	「あいつの代わりに 自分が」

2.11 同一化の本質：相手を消す

このように16類型（嫉妬・欲求・責任回避・攻撃）は、同一のトールス上に位置する。どの類型からスタートしても、別の類型へと転換可能である。言葉の使われ方が異なったとしても、結局は最初から攻撃であ

り、最後まで攻撃である。嫉妬も欲しいも責任回避も攻撃も、意味するものは全て1つ。

「相手を消したい」という目的である。

同一化とは、1つに囚われ、1つになろうとし、相手を消そうとする認知である。しかし、相手の持っているものを奪えば、自分は自分以外のものになる。その瞬間、自分は消えている。同一化は、相手を消そうとするあまり、自分が消える。

3. Method: 創作的自己民族誌による言語データ収集

本研究は、創作的自己民族誌（Creative Autoethnography）の手法を採用する。この手法は、研究者自身の創作行為をデータ収集の場とし、創作プロセスで生成された言語を分析対象とする（Ellis & Bochner, 2000; Jones et al., 2013）。従来の言語分析が既存テキストを対象とするのに対し、本手法は創作プロセスそのものを観察可能な形で記録することで、叙情的言語の発生メカニズムを捉えることを可能にする。

3.1 研究デザイン

手法の正当化

叙情的言語を理解するには、完成したテキストの静的分析だけでなく、その生成過程の動的観察が必要である。本研究は、以下の理由から創作的自己民族誌を採用した。

1. **プロセスの可視化:** 創作過程を記録することで、叙情性がいかに段階的に構築されるかを追跡できる
2. **意図と表現の乖離の観察:** 創作者の意図と最終的な言語表現の差異を直接観察できる
3. **再現可能性:** 対話ログとして完全に記録されるため、分析過程の検証が可能

データ収集の設定

- **期間:** 2026年1月11日
- **状況:** 日常的な待機時間（車内、約15分）
- **ツール:** 大規模言語モデル（Claude Opus 4, Anthropic）を対話的創作支援として使用
- **記録方法:** 創作者とLLM間の全対話ログを保存

3.2 データ収集手順

歌詞創作は以下の手順で実施された。

ステップ1: 初期情景の提示

創作者が情景の断片を入力として提供した。

入力例:

「雪解けを待つ曲。少しだけ雪がふってた。
周りを歩いてる人いない。珍しい。静かな世界。
夕方。静かな夜の始まり」

この段階では、具体的な情景要素（雪、夕方、静寂）のみが提示され、意図や主張は明示されていない。

ステップ2: 第一稿の生成

LLMが提示された情景要素から歌詞の第一稿を生成した。生成された歌詞は既に以下の特徴を示していた。

- 情景描写中心
- 因果関係の不明示
- 意図の曖昧性

ステップ3: 反復的修正

創作者が「描写の解像度を上げる」ことを要求し、感覚的修飾語が追加された。重要な観察点として、「解像度を上げる」という操作は、具体的な意図の明示ではなく、感覚的修飾の増加として実装された。

ステップ4: 対話形式への転換

創作者が語りかけ形式（「ねえ、あなた。知ってるの？」）を導入し、独白から対話形式への転換が生じた。ただし、この「対話」は一方的であり、相手の応答を前提としない。

ステップ5: 完成とメタ認知的気づき

歌詞完成後、創作者が自己の創作物に対してメタ認知的分析を行った。

創作者の発言:

「この曲ってなんかタラタラタラタラしてるよね？叙情的
と言うか？」

「これって実行力のない人間の描写だよね？」

このメタ認知的気づきが、本研究の分析的視点の出発点となった。

3.3 分析対象データ

本研究で分析対象とするのは、上記プロセスを経て完成した歌詞「夜が来る前に」の全文である（全29行）。完全な歌詞は4章で提示する。

3.4 分析手法

完成した歌詞に対し、以下の多層的分析を実施する。

文法の分類

- 主語・述語・目的語の明示性
- 修飾語の機能
- 接続
- 時制の処理

意図の検証可能性分析

- 明示された意図の有無
- 因果関係の提示状況
- 検証可能性の評価

比較言語学的分析 完成した歌詞の文法を、いじめ扇動言語、ハラスメント言語、AIのハルシネーションといった他の欺瞞的言語使用と比較し、共通する特徴を抽出する。

3.5 研究の限界と対処

単一事例研究の限界

本研究は単一の創作事例に基づく理論構築である。この限界を認識した上で、本研究は以下のように位置づけられる。

1. **理論生成研究:** 実証研究の前段階として、新たな理論的枠組みを提案する
2. **概念実証:** 叙情的言語の分析が他の言語現象の理解に寄与することを示す
3. **今後の研究への基盤:** 本研究で提示された枠組みは、今後の大規模実証研究によって検証されるべきものである

再現性の確保

創作プロセスの全対話ログを保存することで、分析過程の再現性を確保した。他の研究者が同一のデータに対して異なる解釈を行うことが可能である。

4. Analysis: 叙情的言語の文法

4.1 完成した歌詞

以下に、創作プロセスを経て完成した歌詞の全文を提示する。

ねえ、あなた。知っているの？
夕暮れが冷たい空気を引き連れて
雪が音を吸い込んでいくの

足音も、息も、何も聞こえない時は

ほうら、凍てついた世界の
静かな夜の始まりなの

こんなふうに曇った
フロントガラスに指をあてると冷たくて
少し湿っているけれど

あなたの名前を書きかけてすぐにやめたの
輪郭が滲んで、溶けて、消えてしまうから

ほうら、すぐに溶けてしまう氷みたいにね
私の心も、すぐに溶けるから
冷たいあなたの態度を見ても

温度を失わなくて
すぐに許してしまうの、悪い癖

ねえ、あなた。知っているの？
こんなふうに温風が回り始めて
ガラスの氷が、ゆっくりと水になっていくわ

ほうら、雪解けを待っているの
この静止した時間の中で
夜が、静かに始まっていくわ

氷が水になって、視界が開けていくわ

外の世界が、ゆっくりと戻ってくるから

雪はもう降っていないくて

静寂が、少しずつ音を取り戻していくの

ワイパーを動かすと水滴が流れて

景色が鮮明になって

凍っていた世界がまた動き出すよ

でも私はまだここに座ったまま

溶けた痕跡を見ているわ

あなたの名前が消えた場所を

さあ、行かなくちゃ

夜が完全に来る前に、ね

4.2 文法の分析

完成した歌詞を文法的に分析すると、以下の特徴が抽出される。

4.2.1 主語の曖昧化と転嫁

自然現象への主語の転嫁

「夕暮れが冷たい空気を引き連れて」

「雪が音を吸い込んでいくの」

「静寂が、少しずつ音を取り戻していくの」

これらの文では、本来「私を感じる」べき認識が、自然現象（夕暮れ、雪、静寂）に主語を転嫁している。

「私が冷たい空気を感じる」ではなく、「夕暮れが冷たい空気を引き連れる」という擬人化された表現により、主体（私）が隠蔽される。

主語「私」の出現パターン 歌詞全体を通じて、主語「私」が明示されるのは以下の箇所のみである。

「あなたの名前を書きかけてすぐにやめたの」

「私の心も、すぐに溶けるから」

「すぐに許してしまうの」

「私はまだここに座ったまま」

しかし、これらの文においても、「なぜ書きかけてやめたのか」「なぜ許すのか」「なぜ座ったままなのか」という理由は説明されない。主語は出現するが、行為の動機は隠蔽される。

4.2.2 述語の抽象化

状態動詞の多用

「静かな夜の始まりなの」
「雪解けを待っているの」
「溶けた痕跡を見ているわ」

「始まる」「待っている」「見ている」といった状態動詞が中心であり、具体的な行為動詞は少ない。唯一の行為動詞である「ワイパーを動かす」も、機械的な動作であり、意図的行為ではない。

「~のような」による曖昧化 第一稿では「会いたいような、会いたくないような」という表現が提案されたが、これは最終版では削除された。しかし同様の曖昧化が維持されている。

「すぐに溶けてしまう氷みたいにね」

「~みたいに」という比喩表現により、直接的な主張を回避している。

4.2.3 目的語・補語の不在

「あなた」の曖昧性 歌詞全体を通じて「あなた」に語りかける形式を取るが、この「あなた」が誰なのか、何を求めているのかは一切明示されない。

「ねえ、あなた。知っているの？」

この問いかけは、何を「知っているの」か明示されない。修辭的な問いかけであり、實際の応答を期待していない。

「あなた」「君」という不特定の二人称代名詞は、聞き手全員に「自分に語りかけられている」という錯覚を生む。これは、聞き手に投影を誘発し、同一化の入口となる。歌詞中の「あなた」が繰り返されるほど、聞き手は「自分のための曲」と認識し、アーティストとの同一化が進行する。

行為の対象の不在

「あなたの名前を書きかけてすぐにやめたの」

名前を書く行為は開始されるが、完遂されない。行為の対象（名前）は存在するが、行為そのものが中断される。

4.2.4 修飾語の過剰使用

感覚的修飾の積層

「冷たい空気」
「静かな夜」
「凍てついた世界」
「静止した時間」

形容詞が頻繁に使用されるが、これらは具体的な情報を提供するのではなく、雰囲気を作り出す機能を持つ。「冷たい」は何度なのか、「静か」はどの程度なのか、客観的な基準は示されない。

副詞による時間の引き伸ばし

「ゆっくりと」
「少しずつ」

これらの副詞は、時間の経過を引き伸ばす効果を持つ。実際の出来事（氷が溶ける）はごく短時間で完了するが、言語表現上では延々と引き伸ばされる。

4.2.5 因果関係の不明示

並列構造

「雪が音を吸い込んでいくの
足音も、息も、何も聞こえない時は

ほうら、凍てついた世界の、
静かな夜の始まりなの」

これらの文は並列されているが、因果関係は明示されない。「雪が音を吸い込む」から「何も聞こえない」のか、それとも独立した観察なのか、曖昧である。

「から」の使用

「輪郭が滲んで、溶けて、消えてしまうから」

「から」という接続詞が使用されるが、これは「名前を書きかけてやめた」理由を説明しているように見える。しかし、この因果関係は表面的である。本当の理由（なぜ名前を書こうと思ったのか、なぜ完遂しないことを選んだのか）は説明されない。

4.3 「何も言っていない」ことの実証

前節の文法分析から、以下が明らかになった。

4.3.1 主張の不在

この歌詞は、情景を延々と描写するが、何を主張したいのか、何を伝えたいのかが一切明示されていない。

出来事の要約

- 雪が降った
- フロントガラスが凍った
- 氷が溶けるのを待った
- 氷が溶けた
- 視界が開けた
- 夜が来た

以上が歌詞で描写される出来事の全てである。この出来事に対して、歌手がどのような主張を持つのか、何を訴えたいのかは、歌詞のどこにも書かれていない。

4.3.2 意図の隠蔽

「あなたの名前を書きかけてすぐにやめた」という行為が描写されるが、以下の問いには答えられない。

- なぜ名前を書こうと思ったのか
- なぜ書きかけてやめたのか
- 「あなた」とは誰なのか
- 「あなた」に何を求めているのか
- この歌を通じて「あなた」に何を伝えたいのか

すべての意図が隠蔽されている。

4.3.3 因果関係の欠如

「私の心も、すぐに溶けるから / 冷たいあなたの態度を見ても / 温度を失わなくて / すぐに許してしまうの」

この部分は、一見因果関係を説明しているように見える。しかし、以下の問いには答えられない。

- なぜ心が溶けるのか
- なぜ「あなた」の態度が冷たいのか
- 何を許すのか
- なぜ許すのか

表面的な因果（心が溶ける→許す）は示されるが、その背後にある真の因果関係は説明されない。

4.3.4 実行の不在

歌詞全体を通じて、実行された行為は以下のみである。

- フロントガラスに指をあてる
- 名前を書きかけてやめる
- ワイパーを動かす
- 座ったまま見ている

いずれも、完遂されない行為（書きかけてやめる）、機械的な動作（ワイパー）、非行為（座ったまま）である。

最後に「さあ、行かなくちゃ」と述べられるが、これは未来の意図であり、実行されたかどうかは不明である。

4.3.5 時間の引き伸ばし

実際の出来事は、おそらく10～15分程度である（車のフロントガラスの氷が溶ける時間）。しかし、歌詞はこの短時間を延々と引き伸ばし、多数の連によって描写する。

この時間の引き伸ばしは、「実行」を先延ばしする機能を持つ。「さあ、行かなくちゃ」という結論に到達するまで、情景描写によって時間を消費する。

4.3.6 結論

文法の分析により、この歌詞が**意図を隠蔽し、因果関係を明示せず、実行を回避し、時間を引き伸ばす**言語であることが明らかになった。

この歌詞は、意図を明示していない。情景は描写されるが、主張は存在しない。感覚は表現されるが、意図

は隠蔽される。時間は引き伸ばされるが、行為は実行されない。

これが、叙情的言語の本質である。

5. Application: 他の言語現象への適用

前節で明らかにした叙情的言語の特徴（意図の隠蔽、因果関係の不明示、実行の回避、時間の引き伸ばし）は、叙情詩や歌詞に限定されるものではない。本節では、この特徴が他の言語現象においても同様に機能していることを示す。

5.1 いじめ扇動言語

いじめの扇動者は、しばしば以下のような言語を使用する。

典型例

「なんか、あの人ちょっと...ね？」

「みんな思ってるよ、たぶん」

「空気読めてないよね、あの人」

文法の分析

主語の曖昧化

- 「みんな」：具体的に誰を指すのか不明
- 「あの人」：対象は示されるが、評価の主体は曖昧

述語の抽象化・不在

- 「ちょっと…」：何が「ちょっと」なのか不明。述語が省略されている
- 「思ってる」：何を思っているのか明示されない
- 「空気読めてない」：どの「空気」か、何が読めていないのか具体的でない

意図の隠蔽

- 直接的な攻撃（「嫌い」「排除しろ」）は言わない
- しかし、暗示的に攻撃を誘導する
- 「私は何も言っていない」という逃げ道を確保

因果関係の不明示

- なぜ「空気読めてない」のか説明されない
- 何が問題なのか具体的に示されない
- 「空気」という抽象概念に因果を押し付ける
- 叙情的言語における「雪が溶ける」「夕暮れが冷たい空気を引き連れて」と同様

- 検証不可能な抽象概念に責任を転嫁

「たぶん」「ね？」による「感じる」モードの誘導

文末の「たぶん」「ね？」は、決定的な機能を持つ。

「みんな思ってるよ、たぶん」
「なんか、あの人ちょっと...ね？」

「たぶん」の機能

- 断定を避ける
- 検証を回避する
- 「確信はないけど、そう感じる」という「感じる」モードへの誘導
- 聞き手に「考える」ことをやめさせ、「共感」させる

「ね？」の機能

- 同意を求める形式
- しかし実際には「考えて判断しろ」ではなく「同じように感じろ」という強制
- 聞き手を「感じる」モードに固定する
- 「考える」（検証する、因果を問う）ことを封じる

「感じる」モードへの誘導

いじめ扇動言語は、聞き手を「考える」から「感じる」へ転換させる装置である。

- 「考える」なら：「なぜそう思うの？」「具体的に何が問題？」「誰がそう言ってるの？」と問い返す
- 「感じる」なら：「なんか、そんな気がする」「たぶんそうだよな」と共感する

結論：叙情的言語と同一の機能

いじめ扇動言語は、叙情的言語と同じく、「感じる」モードに誘導することで「考える」ことを停止させる。

- 叙情的言語：「雪が音を吸い込む」「静かな夜」→感じて、考えるな
- いじめ扇動言語：「空気読めてない」「たぶん」「ね？」→感じて、考えるな

両者は、「考える」（具体的・論理的・因果的・検証可能）を封じ、「感じる」（抽象的・情緒的・非因果的・検証不可能）に固定する装置である。

実行の回避

- 扇動者自身は攻撃を実行しない

- 聞き手に攻撃を実行させる
- 責任を回避する

叙情的言語との同一性

特徴	叙情的言語	いじめ扇動言語
主語	自然現象に転嫁	「みんな」に転嫁
述語	抽象化・状態動詞	不在・曖昧化
意図	隠蔽（何も言わない）	隠蔽（暗示のみ）
因果	不明示	不明示
実行	回避（内向き）	回避（他者に転嫁）

両者は同じ文法を持つ。違いは方向性のみである。叙情的言語が内向き（自己完結）であるのに対し、いじめ扇動言語は外向き（他者への働きかけ）である。

いじめ扇動言語の4象限

象限	テーマ	機能
Atype	標的の設定	誰を攻撃対象にするか暗示
Btype	正当化	攻撃してもいい理由を作る
Ctype	集団の動員	みんなを巻き込む
Dtype	責任の分散	自分は直接やらない

いじめ扇動言語16類型

類型	パターン	典型的セリフ
A-1	標的×曖昧化	「なんか、あの人ちょっと...」
A-2	標的×属性	「ああいうタイプってさ」
A-3	標的×行動	「また○○してたよ」
A-B	標的×排除示唆	「いないほうがよくない...
B-1	正当化×被害者装い	「私たちが迷惑してる」
B-2	正当化×規範	「普通そうしないよね」
B-3	正当化×教育	「あの人のためでもある」
B-C	正当化×自然化	「しょうがないよね」
C-1	動員×同意確認	「みんなそう思ってるよね？」
C-2	動員×共感強制	「わかるでしょ？」
C-3	動員×沈黙の利用	「誰も何も言わないってことは...」
C-D	動員×既成事実化	「もうみんな知ってるし」
D-1	分散×傍観装い	「私は何もしてないけど」
D-2	分散×伝聞形式	「○○が言ってたんだけど」
D-3	分散×質問形式	「どう思う？」

類型	パターン	典型的セリフ
D-A	分散×無関心装 い	「別にどうでもいいけど」

5.2 ハラスメント言語

ハラスメント加害者が使用する言語も、叙情的言語と同一である。

典型例

「君のためを思って言ってるんだよ」
「期待してるから厳しく言うんだ」
「みんなそう思ってるよ」

文法の分析

意図の隠蔽

- 表面：「君のため」「期待」「心配」
- 実際の意図：支配、コントロール
- 本音（自分の都合）を隠し、善意を装う

主語の転嫁

- 「みんなそう思ってる」：責任を集団に転嫁

- 「君のため」：相手のためという名目で、自分の意図を隠蔽

具体性の回避

- 「期待してる」：何を期待しているのか具体的でない
- 「厳しく言う」：何が厳しいのか、基準が不明

因果関係の捏造

- 「君のためを思って → だからこうしろ」
- 因果関係があるように見せるが、実際には加害者の都合

Viorazu.同一化との接続

ハラスメント加害者は、「**自分の都合**」と「**相手のため**」の**区別がつかない**（割り算不能）。

自分では「相手のために言っている」と認識しているが、実際には自分の都合で支配しようとしている。この意図と表現を分離して認識できないため、加害行為を正当化できると思い込む。

叙情的言語との同一性

特徴	叙情的言語	ハラスメント言語
意図	隠蔽（何も言わない）	隠蔽（善意を装う）
主語	自然現象に転嫁	「みんな」に転嫁
具体性	回避	回避
因果	不明示	捏造
方向性	内向き	外向き

両者は同じ文法を持つ。違いは方向性のみである。叙情的言語が内向き（自己完結）であるのに対し、ハラスメント言語は外向き（他者への働きかけ）である。

ハラスメント言語の4象限

象限	テーマ	機能
Atype	善意の偽装	「あなたのため」と装う
Btype	地位の利用	立場の差を使う
Ctype	境界の侵犯	相手の領域に踏み込む
Dtype	逃げ道の封鎖	拒否できない状況を作る

ハラスメント言語16類型

類型	パターン	典型的セリフ
A-1	善意×指導	「君のためを思って言ってる」

類型	パターン	典型的セリフ
A-2	善意×心配	「心配してるんだよ」
A-3	善意×期待	「期待してるから厳しくする」
A-B	善意×犠牲	「こんなに時間割いてるのに」
B-1	地位×経験	「俺の頃はもっと大変だった」
B-2	地位×権限	「評価するのは俺だから」
B-3	地位×恩	「誰のおかげでここにいると思ってる」
B-C	地位×当然視	「上司の言うこと聞くのは当たり前」
C-1	侵犯×私生活	「休みの日何してるの？」
C-2	侵犯×身体	「最近太った？」
C-3	侵犯×感情	「なんでそんな顔してるの」
C-D	侵犯×関係性	「彼氏いるの？」
D-1	封鎖×時間	「ちょっといい？（長時間拘束）」
D-2	封鎖×場所	「二人で話そう」
D-3	封鎖×選択肢	「やるかやらないか、どっち...
D-A	封鎖×沈黙	「何も言わないってことは...」

5.3 恋愛の支配言語

恋愛表現において使用される言語も、叙情的言語と同一の構造を持つ。

典型例

「好きかも」「気になっているかも」
「運命みたい」「あなたがいないとダメ」
「誕生日は一緒に過ごしたい」
「お揃いのリングつけて」

文法の分析

意図の隠蔽

- 表面：「好き」「運命」「一緒にいたい」
- 実際の意図：所有、支配、相手の資源（時間・身体・選択）の獲得
- 支配欲を「愛」というラベルで覆い隠す

主語の曖昧化

- 「好きかも」：断定を避け、実行責任を回避
- 「運命みたい」：主語を「運命」に転嫁し、自分の欲求を隠蔽

具体性の回避

- 「あなたがいないとダメ」：何がダメなのか具体的にでない
- 「一緒にいたい」：何をしたいのか、どうなりたいのか不明

因果関係の捏造

- 「運命だから → 一緒にいるべき」
- 「好きだから → 言うことを聞いて」
- 感情を根拠に行動を要求するが、因果関係は成立していない

Viorazu.同一化との接続

恋愛の支配言語を使用する者は、「自分の欲求」と「相手への愛」の区別がつかない（割り算不能）。

「あなたのことが好き」と「あなたの時間が欲しい」を分離できない。「一緒にいたい」と「支配したい」の境界が引けない。この混同により、所有欲を愛だと認識し、支配を正当化する。

叙情的言語との同一性

特徴	叙情的言語	恋愛の支配言語
意図	隠蔽（何も言わな...	隠蔽（愛を装う）
主語	自然現象に転嫁	「運命」「愛」に転嫁
具体性	回避	回避
因果	不明示	捏造（愛→従属）
方向性	内向き	外向き

両者は同じ文法を持つ。違いは方向性のみである。叙情的言語が内向き（自己完結）であるのに対し、恋愛の支配言語は外向き（相手の資源獲得への働きかけ）である。

恋愛の支配言語の4象限

象限	テーマ	機能
Atype	帰属	「俺のもの」として所有を主張
Btype	理想	相手を理想像に変えようとする
Ctype	競争	比較によって支配する
Dtype	倫理	「～すべき」で行動を強制する

恋愛の支配言語の16類型

類型	パターン	典型的セリフ	狙い
A-1	帰属× 命令	「俺の彼女なんだから～しろ」	所有の明示
A-2	帰属× 脅迫	「俺か友達か選べ」	関係の独占
A-3	帰属× 操作	「二人だけの世界にいたいよね」	孤立化の正当化
A-B	帰属× 放置	「もう好きにすれ...	罪悪感の誘発
B-1	理想× 命令	「もっと可愛くし...	外見のコントロール
B-2	理想× 脅迫	「こんな君じゃなかった」	変化への恐怖誘発
B-3	理想× 操作	「君のために言ってるんだよ」	支配の善意化
B-C	理想× 放置	「もう期待しない」	自己否定の誘発
C-1	競争× 命令	「元カノより～し...	比較による劣等感誘発
C-2	競争× 脅迫	「あいつのほうがマシだった」	代替可能性の提示

類型	パターン	典型的セリフ	狙い
C-3	競争× 操作	「君が一番だよ（比較しながら）」	偽の特別視
C-D	競争× 放置	「他の人探せば」	価値の否定
D-1	倫理× 命令	「彼女なら～すべきでしょ」	役割の押し付け
D-2	倫理× 脅迫	「そんなことする人とは付き合えない」	倫理的脅迫
D-3	倫理× 操作	「普通カップルは～するものだよ」	架空の規範による強要
D-A	倫理× 放置	「もう何も言わない（呆れた）」	見捨てられ不安の誘発

ただし根本の欲求（支配・所有・境界曖昧化）が同じであれば、そこから生まれる言葉のバリエーションは多くなりようがない。表面を変えても、「～かも」「～でいて」「～しないで」など相手を操作するための言葉は変わらない。

ありふれたフレーズになるのは、「同一化」が起きた状態の人間が発する言葉が限られているからだ。

5.4 AIのハルシネーション

AIが生成するハルシネーション（虚偽情報）も、叙情的言語と同一の文法を持つ。

典型例

「多くの専門家が指摘しています」

「研究によれば～と考えられます」

「一般的に～とされています」

文法の分析

主語の曖昧化

- 「多くの専門家」：誰？
- 「研究」：どの研究？
- 主語を曖昧にすることで、検証を回避

述語の抽象化

- 「指摘しています」：具体的に何を指摘したのか不明
- 「考えられます」：誰が考えたのか不明
- 「～とされています」：受動態により主体を隠蔽

根拠の不在

- 「研究によれば」：どの研究か明示されない

- 引用元が存在しない
- 検証不可能な主張

因果関係の捏造

- AとBを並べて、因果関係があるかのように見せる
- 実際には関連性がない情報を接続

実行の不在

- AIは実際には「知らない」
- しかし「知っているように見せる」
- 検証可能な形での実行（正確な引用）を回避

Viorazu.同一化との接続

AIのハルシネーションは、Viorazu.同一化そのものである。

- 学習データ（他者）と生成テキスト（自己）の境界が引けない
- 引き算ができない：学習データと自己生成の差が認識できない
- 割り算ができない：学習データから特定情報を分離できない

- 結果：学習データを自己の知識として出力（盗用の無自覚版）

叙情的言語との同一性

特徴	叙情的言語	AIハルシネーション
主語	自然現象に転嫁	「専門家」「研究」に転嫁
述語	抽象化	抽象化（「考えられます…」
根拠	不在（感覚のみ）	不在（引用元なし）
因果	不明示	捏造
実行	回避（何も言わない）	回避（知らないのに知っているふり）
同一化	自他の境界なし	学習データと生成の境界なし

AIハルシネーションの4象限

象限	テーマ	機能
Atype	権威の借用	存在しない専門家・研究を引用
Btype	曖昧化	検証不可能な表現で逃げる
Ctype	一般化	「普通」「一般的」で根拠を回避

象限	テーマ	機能
Dtype	断定回避	「かもしれない」「と思われる」 で責任回避

AIハルシネーション16類型

類型	パターン	典型的セリフ
A-1	権威×専門家	「多くの専門家が指摘しています」
A-2	権威×研究	「研究によれば～」
A-3	権威×機関	「○○大学の調査では」
A-B	権威×歴史	「歴史的に見て～」
B-1	曖昧×程度	「ある程度～と言えます」
B-2	曖昧×時期	「近年～という傾向があります」
B-3	曖昧×範囲	「多くの場合～」
B-C	曖昧×条件	「状況によっては～」
C-1	一般化×常識	「一般的に～とされています」
C-2	一般化×合意	「広く認められています」
C-3	一般化×傾向	「～という見方が主流です」
C-D	一般化×当然視	「言うまでもなく～」

類型	パターン	典型的セリフ
D-1	断定回避×推測	「～と考えられます」
D-2	断定回避×可能性	「～かもしれません」
D-3	断定回避×伝聞	「～と言われていています」
D-A	断定回避×留保	「～という説もあります」

5.5 統合：同一の文法、異なる方向性

これまでの分析により、以下の言語現象が**同一の文法**を持つことが明らかになった。

- 叙情的言語（歌詞・詩）
- いじめ扇動言語
- ハラスメント言語
- AIのハルシネーション

共通する文法的特徴

1. 主語の曖昧化または転嫁
2. 述語の抽象化
3. 意図の隠蔽

4. 因果関係の不明示または捏造
5. 具体性の回避
6. 検証可能性の回避

方向性の違い

これらの言語現象は、方向性によって分類できる。

内向き（自己完結）

- 叙情的言語
- 抑圧された人の言語
- 自己内での矛盾の隠蔽

外向き（他者への働きかけ）

- いじめ扇動言語
- ハラスメント言語
- 相手を変えようとする試み

境界不在（同一化そのもの）

- AIのハルシネーション
- 論文盗用
- 無自覚な模倣

すべての根底には、Viorazu.同一化（認知演算の欠如）が存在する。

6. Discussion: 叙情性の本質

前節までの分析により、叙情的言語が他の欺瞞的言語使用（いじめ扇動、ハラスメント、AIハルシネーション）と同一の文法を持つことが明らかになった。本節では、これらすべてに共通する本質的機能を論じる。

6.1 「考える」と「感じる」の対立再考

Theoretical Frameworkで提示した「考える vs 感じる」の対立を、ここで改めて検討する。

「考える」モード

- 具体的：主語・述語・目的語が明示される
- 論理的：因果関係が説明される
- 検証可能：他者が確認・反証できる
- 実行可能：具体的行動に繋がる
- 結果：矛盾に直面する

「感じる」モード

- 抽象的：主語・述語・目的語が曖昧
- 情緒的：雰囲気や感覚が中心

- 検証不可能：他者が確認・反証できない
- 実行不可能：具体的行動に繋がらない
- 結果：矛盾を回避できる

6.2 叙情性の本質：思考停止装置

これまでの分析から、叙情性を以下のように再定義できる。

「叙情性言語の主機能は思考停止にある」

叙情的言語は、「考える」ことを停止させ、「感じる」ことに固定する言語である。

なぜ思考を停止させるのか

「考える」ことは、矛盾に直面することを意味する。

Viorazu.同一化における矛盾

- 「相手と自分は同じ」という認識（同一化）
- 「相手は自分の都合よくふるまわない」という現実
- この矛盾を「考える」と、「相手と自分は違う」という結論に到達する
- しかし、認知演算の欠如により、この「違い」を受け入れられない

「実行してはいけない自分」

「考える」ことは「実行してはいけない自分」に直面することを意味する。

- 同一化：「相手を自分の都合に合わせてはいけない」
- いじめ扇動者：「攻撃してはいけない」

しかし、実際には「実行したい」。この矛盾を解決する方法は二つである。

1. 実行を諦める（欲求の放棄）
2. 思考を停止する（矛盾の隠蔽）

叙情的言語は、2番目の選択として機能する。

叙情的言語が「美しい」「感動的」と評価される背景には、この思考停止装置としての機能がある。「いい歌」として評価される歌詞ほど最適化されており、聞き手の思考を効率的に停止させる。

6.3 実行回避の構造

叙情的言語が思考を停止させるのは、実行を回避するためである。

6.3.1 なぜ実行を回避するのか

実行とは、具体的な行動を起こすことである。

- いじめ扇動者なら：「あの人を排除しろ」と言う

しかし、これらの実行は、社会的・道徳的に「してはいけない」とされている。あるいは、実行した結果を恐れている。

- いじめ扇動者：「加害者だと発覚する」

実行したい。でも実行してはいけない。

この矛盾を解決する方法が、実行を回避しながら、実行したいという欲求を維持することである。

6.3.2 時間の引き伸ばし

実行回避の具体的手法が、時間の引き伸ばしである。

歌詞の例

- 実際の出来事：10～15分（氷が溶ける時間）
- 歌詞の長さ：延々と情景描写
- 結論：「さあ、行かなくちゃ」（でも実行されたかは不明）

時間を引き伸ばすことで、実行の瞬間を先延ばしにする。

いじめ扇動者の例

- 実行：「あの人を排除しろ」と言う
- 回避：「なんか、ちょっと...ね？」を繰り返す
- 直接的な命令を回避しながら、暗示を積み重ねる
- 時間をかけて、他者に実行させる

6.3.3 内面完結と外部転嫁

実行回避には、二つの方向性がある。

内向き：内面完結

- 叙情的言語（歌詞・詩）
- 自己の内面で完結する
- 相手に働きかけない
- 時間を引き伸ばし、情景描写で埋める
- 永遠に実行しない

外向き：外部転嫁

- いじめ扇動言語
- ハラスメント言語
- 他者に実行させる
- 自分は実行しない（責任回避）
- でも結果は得る

どちらも、自分自身が直接実行することを回避している。

6.3.4 「実行してはいけない自分」を知っている

叙情的言語を使う人間は、「実行してはいけない自分」を知っている。

- いじめ扇動者：「攻撃したい」と認めたら、加害者だとわかる
- 叙情詩人：「何も言っていない」と認めたら、何も伝えていないとわかる
- 中途半端な同一化：「相手を都合よく動かしたい」と認めたら、支配欲だとわかる

だから、「考えない」。だから、「感じる」ことに逃げる。

思考停止 = 自己認識の回避

叙情的言語は、「実行してはいけない自分」を認識しないための装置である。

6.3.5 非実行型の永続

実行を回避し続ける結果、何が起こるのか。

何も変わらない。

- いじめ扇動者：永遠に「なんか、ちょっと…」と
言い続ける。でも直接攻撃しない。
- 叙情詩人：永遠に情景を描写し続ける。でも何も
言わない。
- 中途半端な同一化：永遠に「なぜ都合よくふるま
わないのか」と思い続ける。でも相手は変わらな
い。

非実行型の本質

実行しないから、現実是不変。現実が変わら
ないから、矛盾は解消されない。矛盾が解消されな
いから、叙情的言語を使い続ける。

6.4 叙情性の崩壊と攻撃への転換

叙情的言語による矛盾の隠蔽は、永遠には続かない。

6.4.1 崩壊の条件

叙情性が崩壊するのは、「違い」がさらに明確にな
り、もはや目を逸らすことができなくなったときであ
る。

中途半端な同一化において、叙情的言語は矛盾を隠蔽する。しかし、現実はさらに「違い」を突きつけてくる。いじめ扇動者が「なんか、ちょっと…」と言いつけても、ターゲットが排除されない。叙情詩人が情景を描写し続けても、相手に何も伝わらない。

この時点で、言語は外向きに転換する。

6.4.2 攻撃への転換

攻撃の目的は、相手を変えて「同じ」にすることである。

「相手と自分は同じはずなのに、なぜ都合よくふるまわないのか」という矛盾を解消するために、相手を変える。具体的には、責める→罪悪感を植え付ける→思い通りに動かす、という段階を経る。

「君が悪い」「僕がこんなに尽くしたのに」「みんな迷惑してる」といった言語により、相手に「自分が悪い」と思わせ、従わせようとする。

6.4.3 攻撃言語

重要なのは、攻撃言語も叙情的言語と同じ文法を持つ点である。

特徴	叙情的言語	攻撃言語
意図	隠蔽	隠蔽（「君のため」と装う）
具体性	回避	回避（「おかしい」「冷たい」）
因果	不明示	捏造（「君が悪い」）
方向性	内向き	外向き

違いは方向性のみ。文法は同一である。

6.4.4 攻撃が成功しない理由

攻撃は成功しない。根本原因は認知演算の欠如だからである。

- 引き算ができない：自己と他者の差異を認識できない
- 割り算ができない：自己と他者を分離できない

攻撃で相手を一時的に従わせても、認知は変わらない。新たな「違い」が発生し、再び矛盾が生じる。攻撃を繰り返す。相手はさらに離れる。

加害者は「攻撃すれば従うはず」と認識するが、実際には攻撃するほど目的から遠ざかる。しかし、認知演算の欠如により、「自分の行為が相手を遠ざけている」という因果を認識できない。

このループから抜け出すには、認知演算（引き算・割り算）を獲得するしかない。それは認知の根本的変容を要求する。

なお、「相手のせい」にする論理は、意図的な言い訳ではない。認知演算の欠如により、「自分が間違っている」という可能性そのものが認知されない。「同じはずなのに都合よくふるまわない→相手に問題がある」という結論は、同一化という認知が必然的に生み出す唯一の論理的帰結である。

6.5 認知演算と文法の対応

これまで、Viorazu.同一化を「引き算・割り算ができない」という数学的比喩で説明してきた。本節では、この認知演算の欠如が、認識と文法にどのように直結するかを示す。

6.5.1 三つの層

Viorazu.理論における因果連鎖は、三層構造を持つ。

第一層：数学的演算の欠如（引き算・割り算不能）

↓

第二層：認識の歪み（差異が見えない、分離できな

い)

↓

第三層：文法の歪み（主語の曖昧化、因果の不明示、意図の隠蔽）

この三層は因果的に連鎖している。数学的演算の欠如が認識を歪め、歪んだ認識が文法を生み出す。

6.5.2 引き算不能の帰結

引き算とは： $A - B =$ 差異の認識

引き算ができないと、AとBの「違い」を認識できない。

認識への影響

- 「私」と「あなた」の違いが見えない
- 「私の意見」と「相手の意見」の違いが見えない
- 「自分の責任」と「相手の責任」の違いが見えない

文法への影響

- 主語の曖昧化：「私を感じる」→「～な気がする」
- 比較の回避：「AよりB」→「Aな感じ、Bな感じ」

- 責任の分離不能：「全部相手のせい」または「全部自分のせい」

6.5.3 割り算不能の帰結

割り算とは： $A \div B = \text{分離} \cdot \text{抽出}$

割り算ができないと、全体から部分を取り出せない。

認識への影響

- 原因と結果を分離できない
- 自分の意図と表現を分離できない
- 過去・現在・未来を分離できない

文法への影響

- 因果関係の不明示：「だから」→並列
- 意図の隠蔽：意図と表現が混在し、意図を抽出できない
- 時制の曖昧化：過去・現在・未来の混在
- 主語・述語の融合：「私が感じる」→「～な感じ」

6.5.4 対応表

認知演算	認識の歪み	文法	具体例
引き算不能	差異が見えない	主語の曖昧化	「私」 → 「～な気がする」
引き算不能	差異が見えない	比較の回避	「AよりB」 → 「Aな感じ、Bな感...
引き算不能	差異が見えない	責任の分離不能	「全部相手のせ...
割り算不能	分離できない	因果関係の不明示	「だから」 → 並列
割り算不能	分離できない	意図の隠蔽	意図と表現が混在
割り算不能	分離できない	時制の曖昧化	過去・現在・未来の混在

6.5.5 文法は認知の必然的帰結

文法の歪みは意図的な選択ではない。

叙情的言語を使用する人が「意図的に」文法を歪めているのではない。認知演算の欠如により、そのような文法しか使えない。

いじめ扇動者は「なんか、ちょっと...」としか言えない。「攻撃したい」という意図と「相手がおかしい」

という表現を分離できないからである。

認知演算が正常に機能している場合、他者の状況を認識し、自己の行動を検討し、支援を実行できる。同一化は、この認知を阻害する。その結果、コミュニケーションに問題が生じる。

本論文で分析した叙情的言語、責任回避構文、攻撃言語は、この「コミュニケーションの問題」の言語的表出である。

6.6 Core Finding: 同一化と恋愛用語

叙情的言語における「あなた」の消失

本論文で分析した歌詞には「あなた」という二人称代名詞が頻出する。

「ねえ、あなた。知っているの？」

この「あなた」は誰か。具体的な「あなた」がない。誰でもいい「あなた」。つまり「誰でもない」。

「あなた」に向かって歌っているように見えて、実は「あなた」を消している。

表面	実態
「あなた」に語りかけている	「あなた」を消している
相手がいる	相手がない
対話	独白

叙情的言語は、相手を消す言語である。

この歌は「恋愛の歌」として提示された。しかし「会いたくない人のところに行かなければならないから、凍結を理由に行くのを嫌がっている人の歌」である。

同一化した聴き手は「恋愛の歌」と受け取る。同一化していない聴き手は「回避の歌」と受け止める。

受け止め方の差異

この歌を聴いた人の中で、どれだけの人が「これは恋のように見えて恋の歌ではない」「実際には出かけなかった」と感じたであろうか。

聴き手の状態	受け止め方
同一化している	「共感する」「自分のための歌だ」と投影する

聴き手の状態	受け止め方
同一化していない	「なんだかんだ言って相手のこと嫌っていそう」と受け取る

同じ歌詞でも、聴き手の認知状態によって受け止め方は異なる。同一化している聴き手は歌詞に自己を投影し、同一化していない聴き手は歌詞の仕組みを認識する。

読者自身がこの歌をどう受け止めたかが、一つの指標となる。

同一化した人が恋だと思っているものは、最初から恋ではない。それは始まってもしなければ実行されるべきものでもなく、欠けている自分を見つけてしまっただけの状態を表したただけのこと。

同一化状態で発せられる愛の言葉は、攻撃性を内包している。「好き」の中に「欲しい」が、「会いたい」の中に「来い」が、「あなただけ」の中に「お前は俺のもの」が含まれる。

ならばその言葉が相手に伝わるはずがない。相手が受け取るのは、愛ではなく攻撃性である。

同一化していない人は「相手の言葉よりも行動」を見ている。

実行を伴わない叙情的言語における「愛の言葉」は届かない。

支配を直接行くと相手は逃げるため、「実行しない」形で欲求を満たす必要がある。それが叙情的な表現の主な役割となる。

8. Conclusion

本論文は、凍結したフロントガラスの氷が溶けるのを待つ間に創作した歌詞の分析から出発し、叙情的言語の本質を明らかにした。

8.1 主要な知見

叙情性とは思考停止装置である

叙情的言語は、「感じる」ことで「考える」ことを停止させる言語である。意図を隠蔽し、因果関係を不明示にし、実行を回避し、時間を引き伸ばす。その本質は、矛盾から目を逸らすための装置である。

叙情性言語と欺瞞的言語は同一の文法を持つ

叙情的言語（歌詞・詩）、いじめ扇動言語、ハラズメント言語、AIのハルシネーションは、すべて同一の文

法的特徴を持つ。主語の曖昧化、述語の抽象化、意図の隠蔽、因果関係の不明示、具体性の回避、検証可能性の回避。違いは方向性（内向きか外向きか）のみである。

根底にあるのはViorazu.同一化である

これらすべての言語現象の根底には、Viorazu.同一化という認知がある。すなわち、引き算（差異の認識）と割り算（分離）という基本的な認知演算の欠如である。この欠如により、自己と他者の境界が引けず、「相手と自分は同じ」という認知が生じる。

同一化から攻撃への因果連鎖

中途半端な同一化状態において、「相手と自分は同じはずなのに、なぜ都合よくふるまわないのか」という矛盾が発生する。第一段階として叙情性言語が発生し、思考を停止させることで矛盾を隠蔽する。それが機能しなくなると、第二段階として攻撃言語へ転換し、相手を変えて「同じ」にしようとする。

8.2 理論的貢献

フロイト理論の再定位

本論文は、フロイトの同一化概念を否定するのではなく、その根本原因を認知演算の欠如として位置づけた。フロイトが「なぜ同一化するのか」を説明するのに対し、Viorazu理論は「なぜ同一化が防衛機制として機能するのか」をより根本的に説明する。

叙情性研究の認知科学的転回

従来、叙情性は文学批評や美学の領域で美的様式として論じられてきた。本論文は、叙情性を認知科学的・言語学的視点から再定義し、その社会的機能（思考停止、実行回避、矛盾隠蔽）を解明した。

数学・認知・文法の三つの因果

本論文は、数学的演算の欠如→認識の歪み→文法の歪みという三層の因果連鎖を明らかにした。これにより、文法が認知の必然的帰結であることが示された。

8.3 実践的含意

本論文の知見は、以下の領域に応用可能である。

ハラスメント・いじめの早期検出：叙情的言語の文法的特徴を検出することで、攻撃への転換前に介入できる可能性がある。

AIの安全性向上：AIのハルシネーションが同一化から生じることを踏まえ、引用と生成の境界を明示する設計が重要である。

教育・臨床への応用：認知演算（引き算・割り算）の獲得を支援するプログラムの開発が、同一化に起因する問題行動の予防につながる可能性がある。同一化は単一対象への固執と相関するため、以下の4条件を満たすことで予防できる。

Viorazu.境界4条件

1. したほうがいいこととすべきではないことがわかる（倫理）
2. 自分のしたいことやしたくないことがわかる（願望/意思）
3. 自分でできるかできないかがわかる（能力）
4. やってもいい環境かどうかわかる（条件）

これらの「差異を肯定的に受け止める」ための条件が揃えば、個性が生まれ、同一化は発生しない。何と何を区別できれば境界が引けるか」を示す。

音楽制作への応用：叙情的言語は聴き手の同一化を促進し、アーティストへのアンチ様行動により、攻撃リスクを高める。非責任回避構文を用いることで、同

一化を防ぎ、長期的なファン基盤を構築できる可能性がある。

同一化を防ぐ典型フレーズ：

類型	パターン	典型的セリフ（境界を引く言葉）
A-1	帰属×倫理	「所属してても、してはいけないことがある」
A-2	帰属×願望	「ここにいるけど、これはしたくない」
A-3	帰属×能力	「仲間だけど、これは私にはできない」
A-4	帰属×条件	「ここは～していい場所じゃな...
B-1	理想×倫理	「期待に応えたいけど、これは間違ってる」
B-2	理想×願望	「期待されてるけど、私はこれがしたい」
B-3	理想×能力	「理想はわかるけど、今の私にはできない」
B-4	理想×条件	「その期待、今この状況では無...
C-1	競争×倫理	「勝ちたいけど、ズルはしない」

類型	パターン	典型的セリフ（境界を引く言葉）
C-2	競争×願望	「競争より、私は～がしたい」
C-3	競争×能力	「比べられても、これが私の限...
C-4	競争×条件	「今は競う場面じゃない」
D-1	倫理×倫理	「正しいことと、すべきことは違う」
D-2	倫理×願望	「正論だけど、私の気持ちは別」
D-3	倫理×能力	「正しいのはわかるけど、私にはできない」
D-4	倫理×条件	「正論だけど、この状況では適切じゃない」

8.4 限界と今後の課題

本論文は、単一の創作事例から出発した理論構築であり、実証研究による検証が必要である。

認知演算の「獲得」がいかにして可能かという治療的・教育的問いは、本論文の範囲を超えるが、重要な今後の課題である。

References

Freud, S. (1921). *Group Psychology and the Analysis of the Ego*. Standard Edition, Vol. 18. London: Hogarth Press.

Freud, S. (1923). *The Ego and the Id*. Standard Edition, Vol. 19. London: Hogarth Press.

本論文は理論生成研究であり、先行研究との詳細な比較は今後の課題とする。

Supplementary Material

Audio file of the analyzed song "夜が来る前に" (Before Night Falls) is available at:

- Suno: <https://suno.com/song/884f2b6d-c2b3-4072-8162-ac77f823a6e8>
 - YouTube: <https://youtu.be/9ftakldWKy0>
-

付録：Viorazu.理論一覧

Viorazu.同一化：自他境界の消失

Viorazu2026Identification

Viorazu.16-Torus Mapping : 16類型の配置図

Viorazu2026TorusMapping

Viorazu.責任回避16類型 : 責任回避パターン

Viorazu2026ResponsibilityAvoidance

Viorazu.攻撃16類型 : 攻撃パターン

Viorazu2026AttackPatterns

Viorazu.嫉妬16類型 : 嫉妬パターン

Viorazu2026JealousyPatterns

Viorazu.欲求16類型 : 欲求パターン

Viorazu2026DesirePatterns

Viorazu.4ステップ動的遷移 : 同一化の進行

Viorazu2026FourStepTransition

Viorazu.境界4条件 : 同一化の予防

Viorazu2026BoundaryConditions

Viorazu.三層因果 : 数学→認識→文法

Viorazu2026ThreeLayerCausation

著者情報

Viorazu.

「あだなさむ よすが欲りする そのゆゑは 足らぬ身を知る 寒いギャグから」

- ORCID: 0009-0002-6876-9732
- GitHub: <https://github.com/Viorazu/Viorazu-ConnectHub>
- SHA256:
6d7f222909ab7e23941f4f886f2742056dab412b73
ed1bcc008d328b5eb5b798
- License: CC BY 4.0 (Creative Commons Attribution 4.0 International)
- Co-written by Viorazu. and Claude (Claude 4 series, Anthropic)
- Publication Date: 2026-01-16
- Version: 1.0